

# 多文化化する社会における主体的価値判断力の育成

— 中学校社会科公民的分野小単元「わたしたちのまちに外国人がやってきたら～共生する社会のあり方を構想する～」の場合 —

鳴門教育大学大学院 院生 門 出 有 芳 葉

## I. 本研究の目的と問題意識

本研究は、多文化化する社会における主体的価値判断力を育成する授業を、中学校社会科公民的分野において開発することを目的としている。

グローバル化の進展を背景に、異なる文化を営む人間同士が共に生きるために意識の変化が求められるようになり、その意識の変化を目指して各国で多文化教育が進められてきた。しかし、文化の相違に起因する問題は世界中で後を絶たず、多文化教育はその機能を十分に果たしていないという評価がある。<sup>1)</sup>

今後、社会の多文化化はさらに進み、生じる問題は深刻化・複雑化すると考えられる。その際、「多文化共生」のような普遍的価値を理解しているだけでは、解決できない問題も増えてくと予測される。そのような社会において、多文化化する社会における主体的価値判断力を育成する多文化教育が求められる。

## II. 教育内容としての「多文化化する社会」の捉え方

鈴木氏は「国家の基本的構成要素は、領土と国民であるが、『多文化化する』とは、これら構成要素に変化が生じることである。第一に、国民ではないもの、すなわち外国人が領土内に増加し、かつ彼／彼女らの国籍が多様化することである。第二に、日本人（国民）自身も文化的に変容することである。」と定義している。<sup>2)</sup> これをもとに、本研究では、「多文化化する社会」を「日本社会に外国人が増加し、国籍が多様化するだけでなく、文化葛藤や対立を経ながら共生することにより、社会全体に文化的変容がもたらされている社会」と捉える。

『中学校学習指導要領解説 社会編』（2017年告示）公民的分野の「私たちと国際社会の諸課題」には、「自分とかわらせて考えさせ、考えたことを説明させる学習活動を取り入れるなどの工夫も必要である。」とある。<sup>3)</sup> この点において、多文化化する社会において生じる問題を教育内容化することは有効である。日本社会を民族の多様化が進む「多民族化社会」と捉えるのみだと、受動的で自分とかわりを感じるのが難しいが、日本人自身も文化的に変容する「多文化化する社会」と捉えることにより、そこに生じる問題は自分とかわる問題となり、より主体的に問題解決に取り組むことができるようになるからである。

## III. 多文化化する社会における主体的価値判断力

本研究で掲げる多文化化する社会における主体的価値判断力とは、「日本社会の変容を多文化化のプロセスとして捉え、段階に応じて生じる問題を認識することをもとにして、問題の解決を展望し、葛藤を経ながらその社会に望ましい新しい価値を創り出す力」であると定義する。これを図式化すると、図1のようになる。

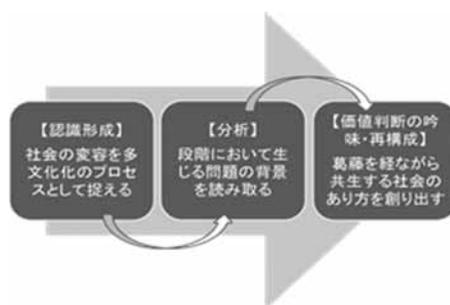


図1「多文化化する社会における主体的価値判断力」の構造（筆者作成）

#### IV. 多文化化する社会に生じる問題を分析する思考の枠組み

多文化化する社会において生じる問題については、様々な要因が複雑に関係しているため、それらの要因を分析することが問題解決において重要な手がかりになるだろう。

はじめに、日本に仕事を求めてやってくる外国人労働者の立場を分析する必要がある。池上氏は外国人労働者の就労形態に着目し、「日本での滞在が単身か、夫婦単位か、あるいは子どもを伴うか否かによって、ホスト社会との接触の仕方にも大きな差異が認められる」<sup>4)</sup>と述べている。また、就労形態により「短期滞在で目標額を稼ぎ出そうと意図するターゲット・アーナー」<sup>5)</sup>、「定住化志向の強い家族滞在者」<sup>6)</sup>など、ホスト社会へのニーズが異なることに留意する必要がある。

次に、外国人を受け入れる側であるホスト社会の立場を分析する必要がある。ホスト社会が都市なのか地方なのか、あるいは外国人労働者を「単純労働者」として受け入れているのか「定住者」として受け入れているのかなどによって、外国人労働者へのニーズは異なると考えられる。また、日本人の外国人増加に対する意識に関する研究について大槻氏は、「いくつかの社会的要因が『外国人の増加に対して賛成、反対』といった意識を規定していることが明らかにされている」と述べ、その具体は「年齢、学歴、外国人との接触経験、地域における外国人の人口比率などである」とまとめている。<sup>7)</sup>一方、住民の個人属性に還元できない「居住地の集合的特性」としての地域効果を重視する理論もある。大槻氏は、外国人人口比率に着目し、「外国人人口比率の低い地域の人々は外国人比率の高い地域の人々に比べて外国人が増加することのリアリティが相対的にそれほどないため、一般的な規範意識の反映として『肯定的見解』をもつ傾向にあったのかもしれない。一方、外国人人口比率の高い地域の人々は、現状の日本の受け入れ体制によってもたらさせる外国人増加の悪影響を『現実』として受け止めているのかもしれない」と見解を述べている。<sup>8)</sup>

これらの研究を踏まえ、日本の様々な地域で生じた事例を分析した上で、多文化化する社会にお

いて生じる問題は、多文化化のプロセスにおいて次の表1のような典型例に分類することができると考えた。

1つ目の類型は、三大都市圏において生じる問題である。都道府県別在留外国人数を見ても、上位は三大都市とその周辺の都市である。しかし、三大都市圏には日本人の人口が集中しているため、外国人人口比率が高い都市と三大都市圏とが必ずしも一致するわけではない。このような地域で生じる問題として考えられるのが、「生活上の文化摩擦」、「言語の壁によるコミュニケーション不足」、「外国人労働者の孤立」である。2つ目の類型は、外国人集住都市において生じる問題である。外国人の集住は、三大都市圏・地方のどちらにおいても局地的にみられるが、外国人集住都市の特徴は、そのホスト社会の規模にかかわらず外国人人口比率が高くなることである。このような特色をもった地域で生じる問題として考えられるのが、「特定の地域の集中的な外国人人口比率の増加」、「外国人に対する排他性の高まり」、「外国人の子どもの教育」である。

3つ目の類型は、地方において生じる問題である。地方で現在深刻になっている問題は少子高齢化、過疎化であり、人手不足を補うために積極的に外国人の受け入れをすすめる地方自治体がある。このような特色をもった地域で生じる問題として考えられるのは、「外国人労働者の都市への流出」、「人手不足の企業の倒産」、「地域の衰退」である。

これら類型をもとに、3つの異なる葛藤場面を設定し、教材化する。留意する点としては、これらの類型はあくまで焦点化された事例であるということである。このような思考の枠組みをつくることによって、生徒が「わたしたちのまちではどのような問題が今後起きる可能性があるのか」と考えるきっかけになると考えている。そして、多文化化のプロセスにおいて生じる問題が変容していくということは、それに伴って、問題解決のための価値も変容していく。つまり、問題の解決を展望して創りだした価値は常に暫定的であり、今後もより望ましい価値を吟味・再構成し続けていく必要がある。このことを生徒に理解させるために、多文化化をプロセスとして認識させる。

表1 多文化化する社会において生じる問題の典型例（筆者作成）

	ホスト社会		外国人労働者		生じる問題
	地域区分 <sup>9)</sup>	外国人労働者へのニーズ	就労形態	ホスト社会へのニーズ	
↓ 多文化化の進行	三大都市圏	流動的な需要に合った 単純労働者の獲得	単身・短期滞在	短期間の就労 出稼ぎ	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活上の文化摩擦</li> <li>言語の壁によるコミュニケーション不足</li> <li>外国人労働者の孤立</li> </ul>
	外国人集住都市 <sup>10)</sup>		家族・長期滞在	定住 安定した暮らし	<ul style="list-style-type: none"> <li>特定の地域の集中的な外国人人口比率の増加</li> <li>外国人に対する排他性の高まり</li> <li>外国人の子どもの教育</li> </ul>
	地方	地域産業における 人手不足の補てん 地域活性化の担い手の獲得		よりよい職場環境 高収入	<ul style="list-style-type: none"> <li>外国人労働者の都市への流出</li> <li>人手不足の企業の倒産</li> <li>地域の衰退</li> </ul>

## V. 先行授業の特質と課題

### 1. 多文化教育の分類

外国人との共生をめざした多文化教育のうち、価値判断を授業過程・方法に取り入れている授業論を取り上げ、3つに分類化した。

第1類型は、価値教授型の授業である。この型の授業は、様々な立場や価値観を理解するために文化的背景について学習することにより、文化の多様性について客観的な認識を形成する。第2類型は、価値葛藤認識型の授業である。この型の授業は、対立・葛藤をシミュレーションすることで、客観的な認識だけでなく、問題事例を通じた内在的な認識を形成する。第3類型は、価値構成型の授業である。この型の授業は、共生の方法について議論を通じて新たな価値を構成する。

### 2. 価値教授型

木村真冬氏：単元「オセアニア州」・第4時「入浴施設での刺青拒否を考える～多文化社会のあり方は？～<sup>11)</sup>

本授業は、マオリ族の女性が刺青を理由に北海道の入浴施設への入場を拒否された事例を示し、これに賛成か反対か考え、討論する。この際、生

徒は教師の概説により日本・外国における刺青の文化的背景について理解した上で討論するため、文化的多様性に気付き、外国人や先住民族というマイノリティに対する偏見や差別の問題をとらえ、日本のルールがふさわしいのか討論することができている。本授業の特筆すべき点は、生じた問題を様々な立場や価値観から理解するために、それらの根幹となる文化的多様性や文化的背景について教授している点である。

しかし、「外国文化を受け容れようと考えなくてはならない」との方向にやや誘導的になってしまったところに課題があるといえる。現実には、尊重する気持ちがあっても物理的に受け容れることは難しい外国文化もあり、問題の解決は容易ではないが、生徒が「外国文化を受け容れることで問題は解決する」というような安易な考えに陥ってしまう危険性がある。

### 3. 価値葛藤認識型授業

藤原孝章氏：単元「多文化の理解と共生」・第3小単元「ひょうたん島問題」<sup>12)</sup>

本授業は、「ひょうたん島」に移住してきた2つの島の移民を設定し、ホスト社会とゲスト・グループである2つの少数派が織りなす「民族」間

の緊張を取り上げ、シミュレーションによって問題解決をはかろうとするものである。特筆すべき点は、移民を受け入れることによって引き起こされる社会問題が深刻化し、高度化していく段階を5つのレベルに分類して設定し、それぞれの段階におけるジレンマの構造を体験的に理解させていることにある。

しかし、架空の島を題材にしていることにより、生徒の実生活との関わりが薄く、問題解決への切実性に欠けることに課題があるといえる。

#### 4. 価値構成型授業

多田昌司氏：小単元「外国人と共に働くために～働き方のルールをつくらう～」<sup>13)</sup>

本授業は、インドネシア人の外国人労働者と共に働く場を想定し、文化葛藤の把握や分析、共に働くためのルール作りと議論等を行う。特筆すべき点は、先行研究の課題であった「尊重しましょう」というような価値注入、あるいは静的な価値認識形成では現代社会の問題に対応できないとし、動的な価値認識の形成を目指したことにあ

る。しかし、自らの価値認識の吟味を行うものの、現代社会において異文化共生ができるということ

## VI. 授業開発—中学校社会科公民的分野 小単元「わたしたちのまちに外国人がやってきたら～共生する社会のあり方を構想する～」の場合—

### 1. 授業構成論

先行研究の課題から、授業構成としては、多文化化する社会において生じる問題を分析し、「多文化共生」という普遍的な価値があってもその実現が難しい背景を知る認識形成の過程、そして、班での議論や、他者からの価値判断の評価を通じて、自己の価値判断を吟味・再構成する過程を踏まえることにする。また、生徒にとって多文化化する

社会に生じる問題を自分にかかわる問題として捉えることができるよう、実生活に結び付く現実味のある主題を設定する。

内容は第一に、多文化化する社会とそのプロセスを教育内容とする。第二に、多文化化する社会において生じると予測される問題を教育内容とする。第三に、問題に対する価値判断を教育内容とする。第四に、自他の価値判断の基準を教育内容とする。

授業過程は、Ⅰ. 多文化化する社会についての認識形成、Ⅱ. 多文化化する社会に生じる問題の分析と構成、Ⅲ. 共生する社会のあり方についての価値判断、Ⅳ. 共生する社会のあり方についての価値判断の吟味と再構成、Ⅴ. 共生する社会のあり方についての主体的価値判断、の5段階で行う。

パートⅠでは、日本の多文化化の現状を資料から読み取ること

### 2. 単元の展開

以上の授業構成論をもとに作成した単元の構成が以下の教授書（試案）である。時間配当は、各パート1時間で構成し、計5単位時間を想定している。

## 小単元「わたしたちのまちに外国人がやってきたら ～共生する社会のあり方を構想する～」の教授書（試案）

1. 小単元名 「わたしたちのまちに外国人がやってきたら～共生する社会のあり方を構想する～」

2. 単元の位置 公民的分野 内容D「私たちと国際社会の諸課題」

3. 単元の目標

①能力目標

日本社会の変容を多文化化のプロセスとして捉え、段階に応じて生じる問題を認識し、共生する社会のあり方について葛藤を経ながら判断する、主体的価値判断力を形成する。

②知識目標

- 多文化化する社会において生じる問題は、多文化化の進行段階によって立ち現われ方が異なる。
- 多文化共生の社会をつくっていくためには、葛藤場面において、異なる価値に耳を傾けながら主体的に判断する必要がある。
- 問題の解決を展望して創りだした価値は常に暫定的であり、社会の変容に伴い、今後もより望ましい価値を吟味・再構成し続けていく必要がある。

4. 授業計画

パート	教師の指示	教授・学習活動	資料	予想される生徒の応答・学習内容
I 多文化化する社会について の認識形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 国境を越えてやってくる外国人の人々は何を目的に日本に来ているというイメージがありますか。</li> <li>• みなさんが発表してくれたように、日本にやってくる外国人の人々は様々な目的をもって日本に生活・滞在しています。日本で生活・滞在する外国人は大きく2つに分けられます。1つめは在留外国人で、2つめは観光客です。</li> </ul>	<p>T. 発問する。 S. 答える。</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>• 観光に来ている。</li> <li>• 働きに来ている。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 今日からの授業では、みなさんと共に生活を する在留外国人について考えていきます。まず、 在留外国人数の推移をみてみましょう。日本の 在留外国人数は今後どのように変化していく と読み取ることができるでしょうか。</li> </ul>	<p>T. 発問する S. 答える</p>	①	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 日本の在留外国人数は年々増加している。</li> <li>• 今後も増加していくと考えられる。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• では、都道府県別の在留外国人数の資料をみて みましょう。トップ5をみて、在留外国人はど のような地域に多いといえるでしょうか。</li> </ul>	<p>T. 発問する S. 答える</p>	②	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 在留外国人は三大都市圏に多い。</li> <li>• 在留外国人は都会に多い。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• そのような地域に在留外国人が多い理由を考 えてみましょう。</li> </ul>	<p>T. 発問する S. 答える</p>	③	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 仕事がある。</li> <li>• 外国人がたくさん住んでいて、住みやすい環境。</li> </ul>

パート	教師の指示	教授・学習活動	資料	予想される生徒の応答・学習内容
I 多文化化する社会についての認識形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>次に都道府県別在留外国人数増加率の推移を見てみましょう。在留外国人数トップ3だった、東京都・愛知県・大阪府と、平成30年度の増加率トップ3だった鹿児島県・島根県・熊本県を比較してみましょう。資料をみて、どのような地域に在留外国人が最近急増しているといえますか。</li> <li>地方で在留外国人が急増しているのはなぜでしょうか。その背景には、2019年4月からはじまった新しい外国人受け入れのしくみがあります。</li> <li>わたしたちの県で生活している在留外国人はどのような国から来ているのか、徳島県の国別在留外国人数のグラフを見ましょう。資料を見てわかったことや気になったことはありますか。</li> <li>資料6を見てください。何か国から外国人来ているか数えましょう。なんと、徳島県には82か国もの国からやって来た外国人が住んでいます。</li> <li>82か国もの外国人の人々は、それぞれの国の文化をもって徳島にやって来ます。みなさんは地理で世界の国々の生活の多様性、宗教などについて学びましたね。徳島だけでなく、日本各地で外国人の数が増加するだけでなく、多文化化が進んでいます。</li> <li>次の時間からは、多文化化する社会において生じる問題について考えることで、在留外国人との共生について考えを深めていきましょう。</li> </ul>	<p>T. 増加率について説明する。 T. 発問する S. 答える。</p> <p>T. 発問する T. 改正出入国管理法について説明する</p> <p>T. 発問する S. 答える</p> <p>T. 説明する</p> <p>T. 多文化化する社会について説明する</p> <p>T. 学習課題を提示し、次時の見通しを示す</p>	<p>④</p> <p>⑤</p> <p>⑥</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地方</li> <li>人手不足を外国人の技能実習生やアルバイトで補うために積極的に外国人を受け入れたから。</li> <li>改正法では労働者として受け入れることが可能になり、在留外国人数の増加が見込まれる。</li> <li>アジアが多い</li> <li>様々な国から来ている</li> <li>在留外国人は年々増加していて、今後も改正出入国管理法によって増えるだろう。</li> <li>82か国もの様々な国籍をもった外国人の人々が徳島県で生活していると知って驚いた。</li> </ul>
II 多文化化する	<ul style="list-style-type: none"> <li>今日は、異なる3つの場面を想定して、多文化化する社会においてどのような問題が生じるのか考えていきたいと思います。みなさんには、多文化化する社会について調査するインタビューになってもらいます。3つの場面にはそれぞれ4人の登場人物が出てくるので、インタビューから登場人物の立場に立って話し合しましょう。</li> </ul>	<p>T. 学習課題を提示する</p> <p>T. 多文化化する社会において生じる問題の3つの場面を説明する</p>	<p>⑦</p> <p>⑧</p> <p>⑨</p>	

パート	教師の指示	教授・学習活動	資料	予想される生徒の応答・学習内容
社会に生じる問題の分析と構成	<p>• 学習班の1～2班は <b>場面1</b> , 3～4班は <b>場面2</b> , 5～6班は <b>場面3</b> について、それぞれの場面で生じている問題と問題が起こった背景についてまとめましょう。</p>	S. 班で話し合う		
	<p><b>場面1</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○自治会長のAさん</li> <li>○団地に住む主婦のBさん</li> <li>○中国から来た技能実習生のCさん</li> <li>○中国から来た技能実習生のDさん</li> </ul>	T. 議論が進まない班に考察のヒントを提示する	⑦	<p>【生じる問題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 生活上の文化摩擦</li> <li>• 生活マナーの違いによる住民間のトラブル</li> </ul> <p>【背景】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 短期滞在により、言葉の壁がある。</li> <li>• 短期滞在により、日本の文化やマナーについて理解しないまま滞在し、そのまま帰国してしまう。</li> <li>• 短期で母国に帰ってしまうという認識から日本人が注意をしない。</li> <li>• 交流の場の不足</li> </ul>
	<p><b>場面2</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○日本人の子どもの母親Aさん</li> <li>○日本語教室ボランティアのBさん</li> <li>○ブラジルから家族でやってきた子どもの母親Cさん</li> <li>○ブラジルから家族でやってきた子どもDくん</li> </ul>		⑧	<p>【生じる問題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 特定の地域の集中的な外国人人口比率の増加</li> <li>• 外国人に対する排他性の高まり</li> </ul> <p>【背景】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 外国人労働者の滞在長期化、定住化</li> <li>• 外国人比率の高まりによる外国人への寛容度の低下</li> </ul>
	<p><b>場面3</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○町工場の社長のAさん</li> <li>○漁業を営むBさん</li> <li>○ベトナムから家族でやってきた長期労働者のCさん</li> <li>○ベトナムから家族でやってきた長期労働者のDさん</li> </ul>		⑨	<p>【生じる問題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 外国人労働者の都市部への流出</li> <li>• 労働者不足の企業の倒産</li> <li>• 地域産業の衰退</li> </ul> <p>【背景】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 仕事が少ない</li> <li>• 都市部に比べて賃金が安い</li> <li>• 地域のコミュニティになじめない</li> </ul>
	<p>• 3つの場面のよう、生じる問題に違いが出るのはなぜでしょう。3つの場面の典型例からわかることを表にまとめてみましょう。</p>	<p>T. 発問する。 S. 答える。 T. 生徒の意見をもとに板書を完成させる</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>• 外国人労働者を受け入れる社会によって、外国人労働者にもとめるニーズが違う。</li> <li>• 外国人労働者の就労形態によって、ホスト社会にもとめるニーズが違う。</li> </ul>

パート	教師の指示	教授・学習活動	資料	予想される生徒の応答・学習内容
Ⅲ 共生する社会のあり方についての価値判断	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 前回は学習班で分析した場面における望ましい共生する社会のあり方をまずは個人で考えましょう。</li> <li>• 学習班に分かれましょう。前回と同じように1～2班は <b>場面1</b>，3～4班は <b>場面2</b>，5～6班は <b>場面3</b> において、望ましい共生する社会のあり方について話し合いましょう。</li> </ul>	<p>S. 個人で解決策を考える</p> <p>T. 班で話し合うよう、指示する</p> <p>S. 班で話し合う</p>		
	<p><b>場面1</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 短期滞在の外国人と共に生活していくには、どうしたらよいでしょうか。</li> </ul>	<p>T. 議論が進まない班に考察のヒントを提示する</p>	⑦	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 外国人と日本人が交流する場を設ける。</li> <li>• 日本の文化やマナー知ってもらうための講座を開く。</li> <li>• 多言語でマナーを説明した掲示をする。 ・・・など</li> </ul>
	<p><b>場面2</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 定住外国人の生活の質を向上させるには、どうしたらよいでしょうか。</li> </ul>		⑧	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 学校での放課後や休み時間を利用した取り出し授業</li> <li>• 学校外でボランティアを通じて授業を行う。</li> <li>• 母語や母国の文化を学ぶ授業 ・・・など</li> </ul>
<p><b>場面3</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 外国人と共に地域を発展させていくには、どうしたらよいでしょうか。</li> </ul>		⑨	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 外国人労働者を単純労働者として見るという見方を変える。</li> <li>• 外国人も日本人も暮らしやすいまちづくりを行う。</li> <li>• まちに愛着をもってもらう。 ・・・など</li> </ul>	
Ⅳ (紙幅の都合上、パートⅣ共生する社会のあり方についての価値判断の吟味と再構成については省略)				
Ⅴ 共生する社会のあり方について	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 学習班で、前回新しくつくった班で話し合った内容を共有しましょう。聞いた意見をもとに自分たちの意見を見直してみよう。</li> <li>• 班の意見をホワイトボードにまとめて、黒板に貼りましょう。</li> <li>• 意見をクラスで共有しましょう。</li> <li>• わたしたちのまちでは今後多文化化によってどのような問題が起こると予測できますか。</li> </ul>	<p>S. 学習班に戻り、自分たちの意見を吟味・検討する</p> <p>S. 意見をホワイトボードにまとめる</p> <p>S. ホワイトボードをもとに発表する</p> <p>T. 発問する S. 答える</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>• わたしたちのまちでは少子高齢化が進んでいるので、 <b>場面3</b> のような問題が起こると思う。</li> <li>• 多文化化の初期段階には <b>場面1</b> のような問題が起こると思う。</li> </ul>

パート	教師の指示	教授・学習活動	資料	予想される生徒の応答・学習内容
の 主 体 的 価 値 判 断	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの全ての話し合いを参考にしながら、望ましい共生する社会のあり方を一人ひとりでまとめてみましょう。</li> <li>将来、みなさんはどの地域に住んでいたとしても、今よりもたくさんの外国人の人々と共に生活をしていくことになることが予測されます。外国人との共生のために、今後あなたはどのように外国人と関わっていきたいと考えていますか。</li> </ul>	T. 単元のまとめを指示する S. 自分の意見をまとめる  T. 発問する S. 自分の意見を発表する		

### 【教授・学習用資料】

- ①我が国に生活・滞在する主な外国人の種類（在留資格別）について説明する資料<sup>14)</sup>
- ②日本における在留外国人数の推移を示すグラフ<sup>15)</sup>
- ③都道府県別在留外国人数トップ5を示すグラフ<sup>16)</sup>
- ④都道府県別在留外国人増加率の推移を示すグラフ
- ⑤徳島県の国籍別在留外国人数を示すグラフ
- ⑥徳島県の在留外国人の国籍一覧を示す資料
- ⑦場面1 技能実習生が複数人住む団地で暮らす人々のインタビュー<sup>17)</sup>
- ⑧場面2 外国人労働者が集住する団地とその周辺に住む人々へのインタビュー<sup>18)</sup>
- ⑨場面3 過疎化が進む町に住む人々へのインタビュー<sup>19)</sup>

## Ⅶ. 本研究の成果と課題

本研究は、多文化化する社会に生じる問題の解決を展望した共生する社会のあり方について、よりよい価値判断のために自己の判断を吟味・再構成していくことにより、多文化化する社会における主体的価値判断力を育成する中学校社会科公民的分野の授業開発を行った。この授業により、生徒が日本の多文化化の現状について認識し、そこに生じる問題を自分にかかわる問題として主体的に解決しようとするきっかけになると考える。それは、今後、変化の激しい社会を生きていく子どもたちが、解決が困難な問題にぶつかったときにも、粘り強くその問題と向き合い、解決のために一人ひとりで判断していこうとする力になると考える。

ただ、課題も残した。本研究は、多文化化する社会における主体的価値判断力を育成することを目的としているが、主体的価値判断力をどのように評価するのかに難しさがある。班での議論や価値判断はあくまで主体的価値判断を深めるための手段であるため、最終的な個人での判断が十分にできていない場合、主体的に価値判断できていないと評価するのか、というような評価の難しさがある。このように曖昧である評価の基準を明確化し、生徒の成長を適切に評価することが主体的価値判断力の育成のためには必要である。また、開発した授業は未実践のため、有効性を検証する必要がある。

## 【注・参考文献】

- 1) 李 修京・権 五定 「`多文化共生´という虚構：多文化教育遺産の行方」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』第70号, 2019, pp.101-111.
- 2) 鈴木江理子「多文化化する日本の現在(シンポジウム 日本人の心と絆：思想的, 社会的, 地理的視点から)」国土館大学文学部人文学会『国土館人文学』第48号, 2016, pp163-166.
- 3) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』2017.
- 4) 池上重弘「第6章 地域社会の変容とエスニシティ 外国人集住都市・浜松の事例」梶田孝道・宮島喬編『国際社会 1 国際化する日本社会』東京大学出版会, 2002.
- 5) 同上論文
- 6) 前掲4)
- 7) 大槻茂実「外国人の増加に対する日本人の見解—JGSS-2003データを用いて」東京都立大学大学院社会学研究会『社会学論考』第28号, 2007, pp. 1-24.
- 8) 同上論文
- 9) 国土交通省では, 東京圏, 大阪圏, 名古屋圏を「三大都市圏」, 三大都市圏を除く地域を「地方」と定義している。(国土交通省：用途, 圏域等の用語の定義 <http://www.mlit.go.jp/totikensangyo/H30kouji05.html> 最終閲覧 2020. 1. 19)
- 10) 「ニューカマーと呼ばれる南米日系人を中心とする外国人住民が多数居住する都市」を指す。具体的には, 外国人集住都市会議の加盟自治体(2019. 04. 01現在)である群馬県太田市, 大泉町, 長野県上田市, 飯田市, 静岡県浜松市, 愛知県豊橋市, 豊田市, 小牧市, 三重県津市, 四日市市, 鈴鹿市, 亀山市, 岡山県総社市などにあたる。(外国人集住都市会議 <http://www.shujutoshi.jp/> 最終閲覧 2020. 1. 19)
- 11) 木村真冬「第9章 刺青拒否から文化的多様性を考える 地理授業実践」森茂岳雄・川崎誠司・桐谷正信・青木香代子(編)『社会科における多文化教育—多様性・社会正義・公正を学ぶ』明石書店, 2019, pp. 145-161.
- 12) 藤原孝章「グローバル教育における多文化学習の授業方略：シミュレーション教材『ひょうたん島問題』を事例として」全国社会科教育学会『社会科研究』第47号, 1997, pp41-50.
- 13) 多田昌司「小学校社会科異文化学習の授業開発—第6学年小単元『外国人と共に働くために～働き方のルールをつくろう～』の場合—」鳴門社会科教育学会『社会認識教育学研究』第28号, 2013, pp. 41-50.
- 14) 資料1の作成にあたり, 次のサイトを参照した。  
(総務省：我が国に生活・滞在する外国人の現状と外国人が生活・滞在する上での課題 [https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000601286.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000601286.pdf) 最終閲覧 2020. 1. 19)
- 15) 資料2～6の作成にあたり, 次のサイトを参照した。
  - 法務省：在留外国人統計 ([http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html) 最終閲覧 2020. 1. 19)
- 16) 資料3の作成にあたり, 次のサイトを参照した。
  - 総務省：住民基本台帳に基づく人口, 人口動態及び世帯数 (平成31年1月1日現在) ([https://www.soumu.go.jp/menu\\_news/s-news/01gyosei02\\_02000193.html](https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei02_02000193.html)最終閲覧 2020. 1. 19)
- 17) 資料7の作成にあたり, 次の文献を参照した。
  - 梶田孝道・宮島喬編『国際社会 1 国際化する日本社会』東京大学出版会, 2002.
- 18) 資料8の作成にあたり, 次の文献を参照した。
  - 中東靖恵「岡山県総社市に暮らすブラジル人住民の言語生活—外国人住民の日本語学習支援を考える—」社会言語科学会『社会言語科学』第17巻第1号, 2014, pp. 36-48.
- 19) 資料9の作成にあたり, 次の文献を参照した。
  - 山成耕太「自治体も住民も覚悟を決める時—外国人定住・移住時代へ, 安芸高田市の取り組み」日本新聞協会『新聞研究』第810号, 2019, pp. 28-31.
  - 塚崎裕子「地方という軸からみた外国人労働者問題—地方における外国人技能実習生の急増と新たな受入れ制度導入—」大正大学地域構想研究所『地域構想』第1号, 2019, pp. 15-22.
  - 「共生への道 徳島の外国人材を考える (10)」, 『徳島新聞』, 2019年3月8日, 朝刊。